天気と季節

幼児クラス　臼井 彩子

テーマとした理由や背景

・保育室に落ちていたすずらんテープを部屋の天井から吊るして雨にしてみたいという子どもの提案から、晴れや雨など気象に子どもが興味を持ち始めた。

・天気と自然物、季節と気温の関係など、自然や気象の面白さに気がつくなど、興味を広げながら探究を深めたいと考えた。

準備した素材や道具、環境の設定

・模造紙、花紙、折り紙、ダンボール等、天気の部屋を作るのに使用できそうな様々な素材を用意する。
・温度計、天気を記録する用紙を用意し子どもが自分たちで記録できるようにする。

活動スケジュール

・10月～3月

天気の部屋を作ろう　（10月中旬）

期待する経験

・様々な素材を用いて、自分のイメージしたものを形にしていく。

・子ども同士で気づきを共有したり、協力しながら取り組んでいく。

子どもの様子

・すずらんスズランテープを細かくすると、シトシトと降る雨。逆に細くしないと大雨や台風のようになることに気づき、子ども同士で工夫しながら取り組んでいた。

・雨が降ると、雷が鳴ることもあることに気がついた子どもが「作りたい。」と言って作り始めたが、なかなかイメージ通りにいかず、納得できない様子だったので、金色の折り紙、ダンボールやダンボールカッターなど、素材や道具を保育者と一緒に探し共に考えながら作り上げた。

・雨を好む動植物の存在に気がついた子どもが、カエルや亀を折り紙で作り始めた。他の活動で作った池を保育者が持ってくると作った動植物を貼っていた。

・「雨の日には、傘が必要だよね。」と、雨から日常に使う道具にイメージを膨らませ、作って雨の下を歩き面白がっていた。

振り返り

子ども

・雨から、動植物や日常の道具にまで発想を膨らませていた。

・雨がたくさん降る時期があることに気がつき、保育者が「梅雨だよ。」と教えると、「夏は晴れが多い。」「冬になると雪が降る。」など、季節によって天気も変わることに気がついていた。

保育者

・子どもが天気から四季について興味を持ちはじていたので、今後興味が広がるように環境を設定していく。

・子どもが意欲的に取り組めるように、天気に関する本を用意したり、製作に意欲的に取り組めるように様々な素材や道具を用意する必要があると感じたので、意識していく。

天気の部屋を作ろう2回目　（10月中旬～11月上旬）

期待する経験

・晴れ以外の天気について考え、様々な素材を用いて自分のイメージしたものを形にしていく。

・天気と季節の関係に気がつき、子ども同士で共有したり、保育者に共感してもらう。

晴れの部屋

虹をかける

雪の部屋

子どもの様子

・晴れの部屋作りでは、どのように太陽を表現するかで悩み、紙に色鉛筆で描くなどしたがなかなか納得のいくものが出来上がらなかった。保育者が、太陽が出てくる紙芝居を読み聞かせすると、大きく作った方が太陽らしいと大きさにこだわり、丸い照明器具に気がついた子どもが利用することを思いつき、皆で協力して作り上げた。

・「晴れの部屋は春みたいにポカポカの部屋だから、お花を咲かせよう！」「雪の部屋は、寒いところが大好きなシマエナガを作りたい！シマエナガは北海道にしかいないんだよ。」「晴れの部屋と雨の部屋の間には、虹をかけよう！お天気雨の時に虹はよく出るんだよ。」と、それぞれが自分の知っている知識を友だちに伝えながら、取り組んでいた。

振り返り

子ども

・うまくいかない場面でも諦めずに、試行錯誤しながら他児と協力していた。

・虹を作っているときに、「虹はどうしてできるのか？」という疑問を持った。「お天気雨や、雨が上がってすぐに太陽が出ると虹も出る。」とある子どもが話すと、それを聞いた子どもが、「プールの時に先生がシャワーで水をバーってやるとそこに光が当たって虹が見えることがあった！」と言うと、「それと同じことが、きっと空でも起こっているんだ！」「絶対そうだ！」と言葉を交わしていた。

保育者

・うまくいかず子どもの手が止まってしまった時に、紙芝居を読んだり、一緒に考えるなど、ヒントを出したり提案することで子どもも諦めずに取り組むことができていた。

・疑問を持った時に、経験に基づいた推測をしている姿を見て、自分なりに考えることができていることに成長を感じた。

・園庭に目をやり、「今は秋だよね。秋の天気ってどんな感じかな？」と実際の今の天気に興味を持っていたので、次回は実際の天気に着目して活動を進める。

今の季節は？　（11月上旬）

期待する経験

・天気、園庭の自然物、気温などから秋を感じていく。気がついたことを子ども同士で共有していく。

子どもの様子

・季節の部屋作りもひと段落した印象を受け、天気から季節に興味を持った子どもが探求を深める様子が見られた。

・残暑が厳しく暑い日が長かったが、やっと秋風を感じられるようになった。子どもも、日差しや木の葉が紅葉し始めたことから季節の移り変わりを感じていた。

・秋の次に訪れる冬に降る雪に期待し、「早く降って欲しいね。」「まだ、秋だからまだまだ降らないよ。」「どれだけ寒くなったら、雪って降るんだろう。」と雪が降る日を心待ちにしていた。

振り返り

子ども

・早く冬が来て欲しいと思っている子どもが、「夏の次に、すぐ冬が来てほしい。」と発言すると、「それだと秋が好きな動物や植物が困る。」「四季の順番はどんなに願っても、順番は変わらないと思う。」と返し、自然の摂理に気がついていた。

・夏野菜は夏、冬野菜は冬、秋には紅葉し、春には花が咲くなど、季節ごとに感じられる自然物の存在に対する発言もあった。

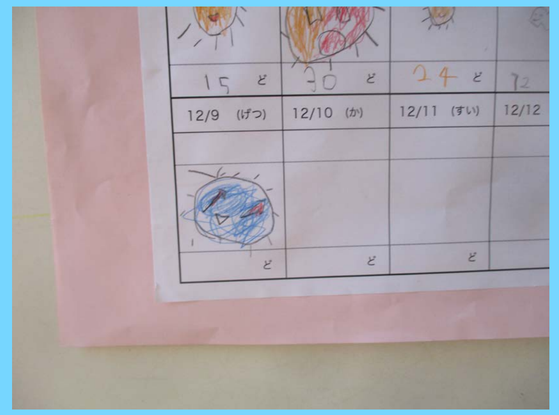
保育者

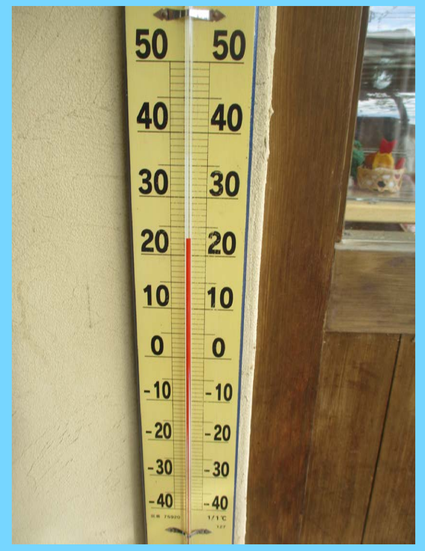
・「どのくらい寒くなったら冬を感じるのか。雪が降るのか。」と、子どもが疑問を持っていたので、温度計と用紙を用意し、気温と天気を記録することを提案した。

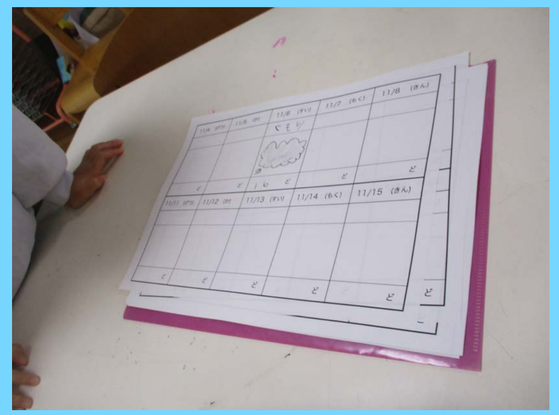
雪が待ち遠しい！気温を測ってみよう（11月下旬～3月中旬）

期待する経験

・気温と天気を記録することで、季節の移り変わりを可視化し、実感する。







子どもの様子

・気温と天気を紙に記録し、同じ気温でも晴れの日と曇りの日では体感に違いがあることに気がついていた。

・暖い日と寒い日が交互に訪れているが、だんだんと気温が低い日が続くようになり、「秋は終わりだね。」「もうすぐ冬が来るね。」と視覚からの情報と、実際に感じる寒さに季節の移り変わりを感じていた。

振り返り

子ども

・最初は意欲的だった子どもたちも、天気を絵と文字で記録することが少し億劫になり、「あ！今日確認するの忘れていた！」と記録をとることを忘れる日も出てきた。

・活動内容を家庭で話し、登園の際に保護者と温度計を確認したり、「今日は雪が降るかもしれないって！ママと天気予報見てきたよ！」と、保護者も一緒に活動に取り組んでくれるようになった。

保育者

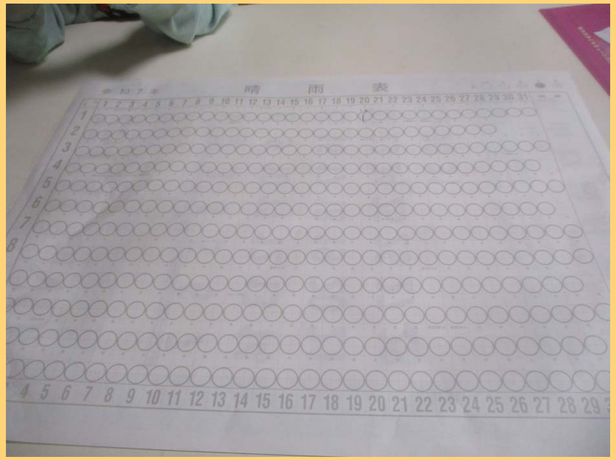
・温度計の見方がわからず保育者と一緒でないと気温がわからなかったり、記録する内容に時間を要したり、気温などに劇的な変化がないので、子どもの意欲が薄れてしまったように感じた。子どもたちが保育者の手を借りずに、自分たちで取り組めるように、温度計の見方を丁寧に教え、より簡潔に記録できる晴雨表を使ってみることにした。

記号は便利（3月）

期待する経験

・自分たちだけで記録できるようになる。

・天気記号を知り、記号の面白さや利便性を感じる。



子どもの様子

・晴雨表を導入したことで、子どもたちだけで記録することができるようになり、毎日確認していた。

・実際に雪が降った日は、「やったー、ついに雪が降ったー！！」と喜んでいた。その時の気温が6度だったのだが、前の週に雨だった日が4度だったことに気がつき、「雨の日の方が気温が低いよ。」「なんで？」と疑問を持っていた。保育者が、「気温を測る時間が違ったのかな？」と声を掛けると、「違ったかもしれない。」「同じ時間に測らないとダメなのかもしれない。」と声が上がり、「もしかしたら地面と空の気温も関係していて、それで雪と雨と決まるのかな。」と考えを伝える子どももいた。

振り返り

子ども

・初めて見る天気記号に興味を持ち、「すごく晴れの時は、雲もなーんにもないからただの丸なんだよ。」「雪のマーク見て！雪の結晶みたいになってる！かわいい。」と、記号の書き方の由来や意味を子ども同士で考えていた。

保育者

・天気と気温を記録することで、雨と雪の日の気温の違いに気がつきなぜだろうと感じていた。記録し可視化することで気がついた疑問だなと思った。

・晴雨表に載っていない雷や台風の記号もあるのかと子どもから問われたので、天気記号の一覧を次回は用意することにした。

たくさんの天気記号（3月）

期待する経験

・様々な天気記号を知り、興味を持つ。

天気記号

天気記号	天気	解説	天気記号	天気	解説
	快晴	雲量 0～1 すくない はれ		にわか雨	対流性の雲から降る にわかあめ
	晴	雲量 2～8 はれ		みぞれ	雨と雪が同時に降る みぞれ
	曇	雲量 9～10 くもり		雪	層状の雲から降る ゆき
	煙霧	視程2km未満 けむり つばたかなさ		雪強し	時間雨量3mm以上 ゆきつよし
	ちり煙霧	ちりや砂が浮遊 さり		にわか雪	対流性の雲から降る にわかゆき
	砂じん あらし	ちりや砂を吹き上げる おきあがる		あられ	氷の粒 直径約2～5mm
	地ふぶき	積雪を吹き上げる		ひょう	氷の粒 直径約6～50mm
	霧	水平視程1km未満 きり		雷	雷鳴と雷光 かみなり
	霧雨	厚い層雲から降る きりみたいなあめ		雷強し	強雷電 かみなりつよし
	雨	層状の雲から降る あめ		天気不明	天気が不明 てんきふめい
	雨強し	時間雨量15mm以上 あめつよし			

子どもの様子

・初めて見る記号に興味を持っていた。雨の記号の下にカタカナの「ツ」と書かれていることに気がついた子どもに、「これは、雨強しって読むんだよ。強い雨ですよっていう意味。」と伝えると、「じゃあ、このマークは雪でしょ？そこにツだから、雪強しだ！」「読めた、読めた！」「これはこれは？」「これは、にわかのニだよ。にわか雨ですよってこと。」「そうすると、これは雪にニだから、にわか雪ってことだ！」「このみぞれの記号は、半分雨で半分雪になってるからすごくわかりやすいね。」と、自分たちで記号を読み、意味がわかることが面白くて夢中になっていた。

振り返り

子ども

・ある子どもが、「すごく晴れですよの日には、丸の中に太陽を描いた方がいいと思うし、雪の時は雪だるまを描いた方がかわいいと思う。」と言うと、「それ無理だよー。今まで天気を絵で描いてて本当に大変だったんだから。僕それだったらもうできない。」「それに雪だるまを描くのが難しい人もいると思うよ。」と話していた。保育者が、「記号はみんなが書くことができて、みんなが意味がわかることが大切なんだね。」と話すと、子どもたちも納得したような表情で頷いていた。

保育者

・天気を絵と文字で記録していた時期に、子どもの興味が薄れ始めていることに気がつき、他の保育者に相談していたところ、一月に新しいカレンダーを準備していた時に晴雨表が付属されていることに気がついた保育者が、「これ使えるのでは。」と持ってきてくれた。そこから子どもの興味は記号までに広がり探求が深まっていったので、自分だけで考えるのではなく、他の保育者に自分の活動を語り相談に乗ってもらうことの大切さを感じた。

まとめ

　天気の部屋を作ることから始まった活動。様々な素材や道具を使って、イメージしたものを形にしようと友だちと協力しながら取り組んでいた。

　そこから、季節と天気の関係へと興味が広がり、各季節の自然物にも着目する姿が見られた。こども一人一人が、気がついたことや疑問に感じたことを、友だちと共有したり、保育者に共感してもらいながら、自分たちなりに考え探求を進めていた。

　さらに、天気の記録を取る中で記号の存在を知り、記号の持つ意味や利便性を自分たちの経験をもとに実感していた。

　活動の中で子どもの興味や意欲が薄れたりした時に、保育者が新しい方法を提案したり、新たな興味や疑問が湧くように、軌道を修正することの大切さも感じた。